第三章　四獣文鏡・六獣文鏡の出土例について

一

中国製四獣文鏡には、縁の厚い、半三角縁というよりも、むしろ平縁に近いものと、弘法山古墳出土鏡のように、半三角縁を呈するものとの、大別して二種類がある。前者は、四獣文鏡よりも、二神二獣鏡が多くみとめられ、銘帯には、かなり長文銘をもつものが多い。縁がうすく、半三角縁を呈する鏡群には、四獣文鏡のほかに、類例の多いものは六獣文鏡がある。これらの鏡群は、いずれも三角縁神獣鏡との直接的な関連を示すように考えられてきたが、文様表出の手法や、獣形表現の面で、また、銘文の内容から考慮すると、三角縁神獣鏡との関連はうすいと考えてよい。

四獣文鏡は、ほとんど鏡背文様として龍虎を表現しているから、原則的には龍虎鏡と呼ぶのがふさわしいが、龍虎一対を鏡背主文様とするものを龍虎鏡と呼びならわしてきたから、それらとは区別しておく方がよい。また、文様表現手法も、龍虎鏡は肉刻によるものが多く、四獣・六獣文鏡の場合には半肉刻によるものが殆んどであるから、両者の区別は明確にしておいた方がよいと考えられる。

二

弘法山古墳出土の半三角縁四獣文鏡と類似する例を挙げてみることによって、弘法山古墳の年代的な問題や、全国的な位置を探る手がかりとしてみよう。出土例をみると次のようである。

忠隈古墳　福岡県嘉穂郡穂波町

丘陵頂部にある円墳で、径三五㍍あった。内部主体は竪穴式石室で、玉類などと共に、三角縁波文帯三神三獣鏡一面、四獣文鏡一面が知られる。四獣文鏡は直径一二・二㌢ある。銘帯がない。(1)（前章二　参照）

月の岡古墳　福岡県浮羽郡吉井町

全長九五㍍の前方後円墳。長持形石棺を収めた竪穴式石室を内部主体とする。玉類・帯金具・刀剣・甲冑・馬具などと共に四獣文鏡一面が検出された。

四獣文鏡は、直径八・二㌢ある。銘帯には「吾作明竟□大石□長宜子富昌」とある。(2)

猫塚古墳　香川県高松市石清尾山

石清尾山頂にある双方中円形の積石塚古墳で、中円部竪穴式石室から副葬品が検出された。石釧・小銅剣・筒形銅器・銅鏃・鉄鏃・鉄斧・刀剣などと共に、五面の鏡が出土しているという。二面の内行花文鏡はいずれも舶載鏡で、一面の倣製三角縁三神三獣鏡がある。四獣文鏡は、直径一四㌢ある。「吾作明竟自有己明而日月世少有延年益寿兮」という銘帯がある。六獣文鏡は、四獣文鏡と同様の文様表現をとり、つくりも酷似している。直径一二・八㌢。銘帯には吾作明竟大吉宜子孫」とある。(3)

籠山古墳　岡山県岡山市日近

大正年間の発見品で、古墳の内容は不明である。伴出品として剣・斧・玉類がある。四獣文鏡は、直径一〇・八㌢ある。銘帯はあるが型流れのため判読しえないという。(4)

蔵王原遺跡　広島県福山市千田町

果樹園耕作中に、円形石築遺構中から土器片と共に採集したものであるという。四獣文鏡は、直径一一・三㌢あって、銘帯がある。「□方作竟□大工青白宜子」と読める。(5)

塚本古墳　兵庫県宍粟郡山崎町野村

大正年間に出土したもので、古墳については、円墳であったらしいこと以外は何もわからない。伴出遺物も不明である。四獣文鏡は、直径一〇・九センチあるが、半分を欠失している。鋳上りも良好で銘帯がある。遺存部には「上方作竟真大……宜孫子」とある。(6)

三ツ塚二号墳　兵庫県竜野市揖西町龍子

円墳に竪穴式石室があり、夔鳳鏡一面と四獣文鏡の伴出が知られる。四獣文鏡は、直径一一・〇センチある。鋳上り不鮮明で、銘帯らしき区画があるが銘は読めない。踏み返しによるものではないかという。(6)

平縁素文縁をもち、内区主文様が弘法山古墳出土例と近似するものとして次の三例があげられよう。

熊本山古墳　佐賀県佐賀市久保泉町

円墳に舟形石棺を内部主体としてもち、玉類・刀剣・短甲などを伴出した。

四獣文鏡は、直径一〇・三センチあって銘帯をもつ。銹のため全文を判読できないが「……宜子」と二字は判明している。(7)

節句山二号墳　徳島県徳島市八万町

古墳の内容や伴出品は不明であるが、四獣文鏡一面が知られる。直径一〇・七センチで、銘帯には「上方作竟真大工長宜子」とあるという。前例、佐賀県熊本山古墳出土例に酷似している。面径に若干の差がみとめられるが、同笵品として

もよいだろう。[8]

薬師塚古墳　群馬県太田市本矢場

前方後円墳で粘土槨を内部主体とする。副葬品として玉類・石釧・銅鏃・刀剣などのほかに六獣文鏡がある。直径一〇・九センチメートルで銘帯があり、「上方作竟真有□□宜子□」と判読できる。[9]

以上の二種三面は全体の造りにきわめて類似した点がみとめられる。

一方、前述の四獣文鏡と、文様表出手法を同じくする半三角縁の六獣文鏡の例をあげてみると、つぎのようなものがある。

猫塚古墳　香川県高松市石清尾山（既述）

中小田一号墳　広島県安佐郡高陽町

古墳の詳細については不明ながら、六獣文鏡一面が知られる。直径一二・九センチメートルで銘帯をもつ。「上方乍竟□□工青龍白子」とある。

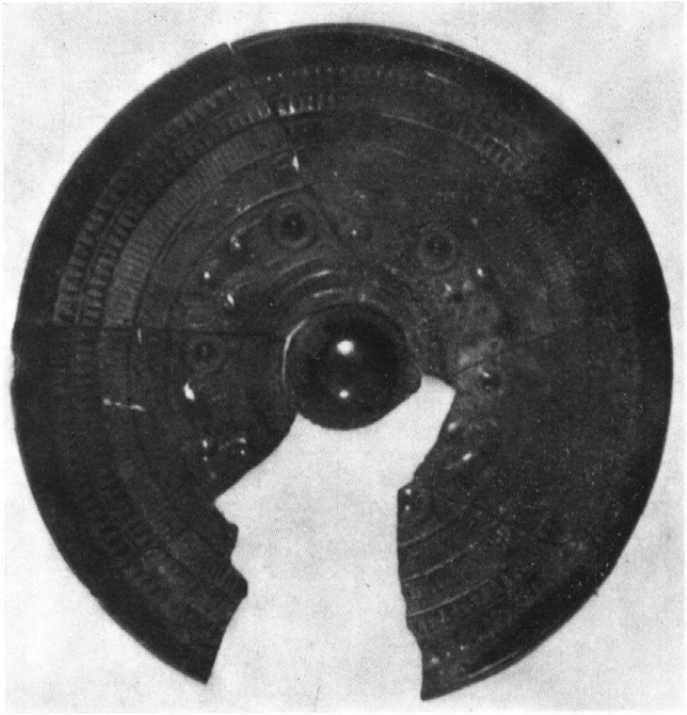
松本一号墳　島根県飯石郡三刀屋町

全長五〇メートルばかりの前方後方墳で、二基の粘土槨が発見された。第一主体から刀子・剣形鉄器・針・玉類と共に六獣文鏡が検出された。面径一三・〇センチメートルあって銘帯をもつ。銘文は銹のため判読できず、わずかに「……孫子……」の二字が判明したにすぎない。[10]

百々池古墳　京都府京都市右京区樫原

丘陵上にある円墳で、内部主体は竪穴式石室をもつ。石釧・車輪石・玉類と共に八面の副葬鏡があった。舶載三角縁神獣鏡二面のほか舶載三神三獣鏡・画文帯神獣鏡各一面、倣製三角縁神獣鏡・獣帯鏡・方格規矩文鏡各一面と一面の六獣文鏡がある。

六獣文鏡は、直径一三・六センチあって銘帯をもつ。「□□自有道青龍□□□□□□長宜子□」と読める。(11)



第29図　中山三六号墳出土の半三角縁六獣文鏡

笹ヶ根一号墳　愛知県名古屋市守山区

丘陵上の円墳で、粘土槨を内部主体とする。副葬品は、刀子・斧・櫛などで、六獣文鏡が伴出している。六獣文鏡は、直径一二・六センチで銘帯には「上方作竟□大工子」の銘がみえる。(12)

中山三六号墳　長野県松本市中山仁能田

丘陵上にある円墳で、粘土床をもつ木棺直葬の可能性が強い。粘土床に接して土器・六獣文鏡が検出された。六獣文鏡は、直径一三センチで銘帯をもつ。銘帯は「上方作竟自有紀宜□□」と読める。(13)（挿図第二九）

平縁素文縁で、内区主文様が半三角縁六獣文鏡と共通

するものは、岡山県赤磐郡山陽町・吉原六号墳、群馬県新田郡新田町・木崎赤堀古墳出土の二面が知られる。吉原六号墳例については資料の報告がないので、詳細は不明である。木崎赤堀古墳は、円墳であったと伝えるのみで古墳の内容は不明である。木崎赤堀古墳例は、直径一二・六メートルで銘帯があり、「上方乍竟真大工□左□□子」と読める。(9)

注

1 森貞次郎「忠隈古墳」（『考古学年報』昭年三十年度　日本考古学協会）、児島隆人・藤田等「忠隈一号墳」（児島隆人・藤田等編著『嘉穂地方史・先史編』嘉穂地方史編纂委員会刊）昭和四八年

2 島田寅次郎「日ノ岡・月ノ岡古墳」（『福岡県史跡名勝天然紀念物調査報告書』一）　大正一四年

3 梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告一二冊）昭和八年

4 後藤守一『漢式鏡』（三二頁）大正一五年
後藤守一『古鏡聚英』上篇（図版七五―七）昭和一七年

5 村上正名「備後芦田川下流域の古墳群」（『古代吉備』三）昭和三四年

6 後藤守一「帝室博物館の新収品」（『考古学雑誌』一〇―四）大正八年
鎌谷木三次『播磨出土漢式鏡の研究』昭和四九年

7 佐賀県教育委員会編『佐賀県の遺跡』昭和三九年

8 末永雅雄・森浩一『眉山周辺の古墳』（徳島県文化財調査報告書九）昭和四一年

9 梅沢重昭「群馬県地域における初期古墳の成立(一)」（『群馬県史研究』三）昭和五一年
後藤守一『古鏡聚英』上篇（図版七五―三）昭和一七年

10 山本清『松本古墳調査報告』（島根県教育委員会）昭和三八年

11 梅原末治「川岡村岡の古墳」（『京都府史蹟勝地調査会報告』二）大正九年

12 久永春男『守山の古墳』調査報告第一　昭和四一年

13 原嘉藤・小松虔「長野県松本市中山第三六号古墳（仁能田山古墳）調査報告」（『信濃』二四―四）昭和四七年